
光無き闇にありふれた街

釈迦堂 和也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光無き闇にありふれた街

【Nコード】

N0537R

【作者名】

釈迦堂 和也

【あらすじ】

『この世界に光などありはしない』

『そんな事はねえさ、確かに闇にありふれてやがるが光に生きてる奴もたくさんいるぜ』

『そんな表面上に過ぎない光に生きて闇に生きる者を見下す奴が目障りだから世界を創り直そうとしてるんだよ』

『テメエのやろうとしてる事は世界を創り直すんじゃない無にするだけだろ』

『悪人が何を戯れ言を』

『これじゃどっちが悪人か分からねえなあ』

『くっ、次はこうはいかん！次にあった時は貴様を倒し世界を再生させる』

謎の青年はそう言い残し消えた。

『やれやれアイツも困ったモンだねえ』

そう言うところの男釈迦堂もまたこの戦いによって破壊され尽くした荒野を後にした。

そしてその戦いから5年の月日が流れた……………

平穏な日常

『おはようございまーす』

『おう、おはよう』

『おはよう』

『おはよう』

『ういーっす』

『おい、ちゃんとおはようって言えや』

生徒達と挨拶を交わす釈迦堂。

現在この峰浜高校の教師である。

『やれやれガキは元気だねえ』

『釈迦堂先生ガキとか言っちゃ駄目ですよ』

そう言ったのは同じく教師の高畑である。釈迦堂と同じ年で担当は英語である。

『真面目だねえ、アンタは』

『釈迦堂先生が不真面目過ぎるんですよ!』

『おはようございます釈迦堂先生、高畑先生』

『おはようございます近衛校長』

『おはようございます』

釈迦堂も高畑に続いて挨拶する。

『いい天気ですねえ、今日も1日よろしく願いしますね』

『はい!』

そう元気よく返事をする高畑は職員室へ入っていった。

『それじゃあ俺も』

そう言う釈迦堂も職員室に入っていくとする。

『釈迦堂先生ポケットに手をつ突っ込んでんじゃ駄目ですよ』

そう言って校長は校庭に出ていった。

教師として

職員室に入り自分のデスクに着くなりあくびをする釈迦堂。

『はぁ、眠い。昨日徹夜でゲーセンで遊んでたからか』

『生徒を指導するのにゲームセンターに行くのはいいですが、なぜそこで徹夜するんですか…』

そう言ったのは席が隣の高畑である。

『いや、最近の若い奴はゲームばっかやってるせいか結構手強いっすわ』

『???』

『いや、生徒といえど勝負挑まれたらやるしかないでしょう。さっさと倒せば帰ると思ったんだが、意外としぶとくて、やっと倒したと思ったら今度は『麻雀で勝負や』言うてきて、あっさり倒して帰るかと思ったら勝手にお金追加してコンティニューしやがって、まあ最後は国士無双でかんぷなきまでに倒したたらようやく諦めて帰りましてね、時計見たら0時回ってまして、おかげで寝不足なんですわ、ふぁぁぁ』

再びあくびをする釈迦堂。

『遊んでないで指導してくださいよ』

呆れている高畑。

『ふぁぁぁ、こんな時に限って1時間目から授業とはついてないねえ。ほな行ってきましたわ』

そう言って職員室を後にする釈迦堂。

『何であの人が生徒指導やってるんだ？そして国語とか教えられるのか？』

日々疑問の増えていく高畑であった。

釈迦堂のデスクの上には漫画5冊が置かれていた。

『これは生徒から没収したのか、それとも私物なのか？』

何もかもが分からなくなっていた…

戦闘狂

『はああああ…ふん!!』

峰浜町のとある山奥で爆音が響く。

『ふん!ふん!ふん!』

次々と大木が倒れていく。

『よし、次、気功波』

『はい!』

少年が気を集中するとうっすらと手に光が灯る。

『気功波!』

少年の前方30m程の位置にある大木が揺れた。

『駄目だ駄目だ、なってねえな』

そう言っ手て手に気を集中すると

『オラァ!』と気功波を放つ。

男の前方30m程の位置にある大木が3本消し飛んだ。

『すごい、さすが釈迦堂先生です』と少年は感心すると同時に驚いていた。

『何感心してんだ、これくらい出来て当然だろ、涼馬』

『いや、こんな事出来るの釈迦堂先生と高畑先生くらいですよ。普通の人がこんな事出来ないですよ』

『そうかあ?でも世界にはこれくらい出来る奴は何人かいるぜ?校長も出来るしよお』

『世界に何人かいるうちのすでに3人がこの学校にいるなんて…っていうか、校長も出来るんですか!?』

『まあ、涼馬も気は使えんだから多少なりとも素質はあるみてえだな』

『本当ですか!?』

嬉しそうな涼馬。

『多少だぞ、多少。それくらいで喜んでんじゃねえよ、ったく……』

…おっと、もうこんな時間か。涼馬もう暗いから帰れ』

『はい！明日も来ていいですか？』

『好きにしろ。いるかどうかは分かんねえがな』

そう言うのと涼馬は山を降りていった。

『！？この気は高畑か』

『こんばんわ。修行ですか？』

『こんな時間に何かようか？』

『ええ、実はちよつと困った事に』

『……………なるほどねえ。つまり戦えるってわけか』

心底嬉しそうな釈迦堂。

『釈迦堂、学校を護るのが私達の仕事ですよ』

『分かっているって、でも戦えるんだから嬉しくもなるだろ。テメエは定期的にW R S Aで活動してやがるが俺は5年も戦ってねえんだぞ！戦いに飢えてるんだよ』

(W R S Aとは世界復興支援機関(World Revival supported)の略で高畑はその1人で釈迦堂も5年前までは共に活動していたが飽きたとの理由で辞めた)

『それなら釈迦堂もまたやりますか？』

『戦ってるだけでいいならいいが、ボランテアとかだりいしなあ』

『それじゃあ無理ですね』

そんな談笑をしていたその時！！

『っ！？オラァ！』

『何っ！？見つかっただと』木が消し飛び、隠れていた男が出てきた。

『何者だテメエは』

男は無言で銃を構えるといきなり発砲してきた。

『何者っかって聞いてんだろがオラァ！』

『なっ！？避けただと』

釈迦堂は弾を避けると相手の腹に拳を突き刺した。

『がはっ！？』

男はその場に崩れ落ちた。『こりやおもしろくなりそうだな
邪悪な笑みを浮かべる釈迦堂。』

『やれやれ、相変わらずですね』
呆れる高畑。

『後は任せるわ。俺は帰る』

『何者か聞かなくていいんですか？』

『明日になりゃ分かんたろどうせ？』

そう言うとき釈迦堂は帰っていった。

『学校の一大事だというのに本当に緊張感のない人ですね』
そう言うとき高畑も男を担いで帰っていった。

真っ暗な空に月が怪しく輝いていた…………

邪心と野望

翌日の夜…学校にて

『…で、いつになったら敵さんは出てくんのだ？』

釈迦堂は眠そうな目をこすりながら言った。

『予定ではもうそろそろ現れるはずなんですが…』

高畑が応える。

『おかしいのう、そろそろ現れるはずなんじゃが？』

近衛は首を傾げた。

『どこへ行くんじゃ釈迦堂？』

釈迦堂は立ち上がるところ言った。

『どこって、帰るんすよ。待ってても暇ですし…』

それに校長と高畑がいれば充分でしょ？

話によれば今回の敵はよく知らないみたいですけど少なくとも5年前戦った奴らとは関係ないんでしょ？』

『恐らくそうじゃが、敵の正体が分からん以上、釈迦堂君にもいて欲しいんじゃが…』

『考え過ぎでしょう？それに校長と高畑を倒せる奴なんていないでしょう？5年前の敵を除けば…』

『つー訳で帰りますわ。』

まあ何かあったら呼んでください』

そう言うのと釈迦堂は学校を後にした…

『何か胸騒ぎがするんじゃが』

（路地）

『もしもし俺だ。そろそろ始めろ』

く学校く

『遅いですね…敵』

高畑が眠そうに言った。

『ふむ、来ないのかのう』

近衛が言ったその時！！

『むっ！？高畑君どうやらすでに囲まれているみたいじゃぞ』

『いつの間に！？さっきまでは全く気配すら感じなかったのに』
外には数百もの人間や魔物が学校を取り囲んでいた。

『なぜこの世界に魔物が！？』

まさか5年前の敵と関係が？』

『高畑君詮索は後じゃ、すぐに片付けるぞ』

そう言うのと近衛は腕に魔力を集中した。

『雷轟！！！！』

暗雲が割れ雷が魔物達を一掃する。

『さすが校長ですね。』

伊達に世界最強と言われてない』

高畑もつかさず両手に気を集中する。

『衝風撃！！！！』

かまいたちが魔物を一掃する。

しかし次々と湧き出てくる敵。

『やれやれ切りがないのう』

『釈迦堂も呼びますか？』『そうするか…』

すると屋上から

『まあ慌てなさんなって、よっと』

赤毛の青年が飛び降りてきた。

『新手か！？』

高畑が構えた瞬間だった。『っ！？バカな！？』

男は物凄い勢いで懷に飛び込むとパンチ1発で高畑をダウンさせた。

『いっちゃあがりっ♪』

近衛は驚いていた。

『高畑君を一撃で倒すじゃと！？』

『あんたが世界最強と呼ばれている近衛鉄心だなっ』

そう言っていると片手に魔力を集中し

『炎蒸猛！！！！』
えんじょうもう

近衛の四方八方から炎が襲う。

『雷護！！』
ラムウ

雷の膜で炎を防ぐ。

『お主も魔法が使えるのか』

『あんたこそ凄まじい魔力だなっ』

『悪いが手加減は出来んぞい。』

これで決める！！大雷龍！！！！
デストラクシオン

雷の龍が男を襲う。

『おいおい、雷系最大魔法じゃねえか！』

これはさすがにやばいぞっ』

男は避けようとした…が

『っ！？動かねえ……電磁波か！？』

『無駄じゃぞいここにくたばるんじゃ』

雷の龍が男に直撃した。

と思われたが

『防がれたじゃと!?!?』

『何だこの魔方陣?』

男は驚いていた。

その時男の後ろから

『しっかりしてくださいよレノさん』

少年が現れた。

『君はたしかうちの生徒の涼馬君。どうしてここに?』

いや、それよりどうして君がそんな魔法を?』

近衛は驚いていた。

そんな近衛をおかまいなしに涼馬は

『レノさん真面目にやってくださいよ。』

僕は守護系の魔法は得意ですけど攻撃系の魔法はまだまだなんですよ。

だからレノさんじゃないと倒せないんですよ?

魔物も役に立たないし…』

『って言ってもねえ?』

相手一応世界最強だぜ?

さすがの俺でもちよっときついぜっ』

『うーむ、2人相手じゃとちよいと面倒じゃな。』

：お、高畑君気が付いたか』

高畑が目を覚ました。

『近衛校長どうしましたようか?』

それにしてもこんな時に釈迦堂の奴はいったい何をやってるんだ?』

『やべっ、アイツも目を覚ましたみたいだぞ?』

どうする涼馬?』

『どうするも何も僕は援護しかできませんし…』

く路地く

『苦戦してるみたいだねえ…
そろそろ加勢しに行くか』

く学校く

『くそ、こいつら強すぎだろ！？
どうすっかなあ？』

レノ達は劣勢を強いられていた。

『わしらを相手にここまで戦ったんじゃからお主らも充分強いぞい』
近衛と高畑も傷つきながらも互角以上に戦っていた。

『それじゃあ今度こそ最後です。
大衝風撃！！！！』

巨大なかまいたちがレノ達を襲う。

『万事休すか！！』

レノが諦めかけたその時！

『おう派手にやられてんな』

『釈迦堂君！！』 『釈迦堂！！』

高畑が手を止める。

『遅いぞ釈迦堂』

『おせえぞつと釈迦堂』

『いやぁいい勝負になると思ってたからちよつと見てたんだが…』

『何呑気な事言ってるんだい？』

こっちはやられそうな所だったんだぞ！』

『何呑気な事言ってるんだよ！』

こっちはついさっき殺されそうだったんだぞ』

『??? 釈迦堂、コイツらお前の知り合いなのか？』

と高畑とレノが同時に言う。

『見てたんだがお前らじゃこの2人相手にするのはまだちよつとき
つかったか？』

『釈迦堂、お前何を言って……ぐはっ!？』

高畑が口を開いた瞬間釈迦堂の拳が高畑のみぞおちを突き刺す。

崩れ落ちる高畑。

『釈迦堂!! お前何を!？』

驚く近衛を尻目に

『この時を待っていた!!』

わりいが俺の野望のためにじじいには死んでもらうぜ!!』

驚く近衛は

『野望とは何じゃ？』

それにわしを倒せると思っておるのか？』

『俺の野望、それは世界の改変だ、そしてそのためには世界最強と呼ばれるてめえの存在は邪魔なんだよ!!
いつまでも世界最強だと思うなよ?』

『世界の改変か、それはまた大きく出たもんじゃのう。
じゃが釈迦堂、お前ではわしを倒すのはちと無理があるのう』
余裕の表情の近衛だがその顔はすぐに凍りつく。

『くっくっく、じじい!! てめえが雷なら俺は闇だ』

釈迦堂の周りをドス黒いオーラが漂う。

『そっ、その力は!!!!』

終局それは新たな旅の始まり

辺り一面に闇が広がる…

『てめえの魔力がどれだけ強大でももう俺には届かねえ』

らいこうは
『雷光波！！！！』

雷を帯びた気功波が釈迦堂目掛けて放たれる。

しかしその波動は釈迦堂の手前で闇にかき消された。

『どうしたどうしたあ！！効かねえぞ？』

『むう、これならどうじゃ！！』

近衛は大雷龍を放つ。

だがそれも闇にかき消されてしまう。

『今度はこっちの番だ！！』

ダークネスウェーブ
『闇の波動！！！！』

近衛の身体が闇に包まれる。

『何！？身体が動かん！』

『俺の闇は魔法使いにとっちゃあ天敵だ。

魔法を無力化し、術者の力を奪う。

さらに…』

釈迦堂は両手に魔力を集中すると、

『闇の吸生！！！』
ブラックホール

完全に闇に包まれる近衛。

『ぐ、ぐおおおお！？』

魔力が吸い取られるじゃと！？』

『俺の闇は魔法を無力化するだけでなく、その力を奪いとる。つまり…』

闇がさらに深みを増していく…

『これは！？ 釈迦堂の力がどんどん増しておる！？』

『ふっふっふ…』

はぁーはっはっは！！！！

力がみなぎる、さすがはじじいの魔力だ！』

近衛の魔力を奪いとり自分の力へとしていく釈迦堂。

『これで終わりだ！』

いや始まりか？

新時代のなぁ！！！！』

『む、無念…』

近衛は成す術もなく魔力を吸い尽くされると闇に呑み込まれ跡形も無くなってしまった。

そして高畑も呑み込まれていく…

『終わったか…』

闇が晴れ、そこにはいつもの釈迦堂がいた。

『すまねえな。じいさん、高畑。』

俺は俺のやり方でこの世を変える。

てめえらが反対しなけりゃこんな事せずに済んだんだが、
邪魔されると面倒なんぞな。』

『ぐっ！？』

釈迦堂が膝を着く。

『おいおい、大丈夫かよつと』

レノと涼馬が出てくる。

『お前らか、なあに心配ねえ。』

ちよいと闇の力を多用し過ぎただけだ。

すぐに楽になる』

釈迦堂はそう言うのと立ち上がる。

『さて、邪魔者はいなくなったしゆつくりと事を進めていくか？』

『そうだな。でもその前にまずは身体を治すのが先だなつと』

『そうだなお前ら派手にやられたもんなあ』

『そうですね、派手にやられましたね？レノさん』

『お互い様だろつと』

『そんじゃ世界を改変する旅に出かけつか』

釈迦堂、レノ、涼馬の3人は今回の事件によって変わり果てた学校

もとい、峰浜町を後にする。

今回の事件は瞬く間に世界中へと広まっていた。

く海の向こうネウロークく

??? 『これは強そうな奴が出て来やがったな』

新たな戦い

『ああ、腹減ったなあ…』

腹を押さえながら1人そう呟く釈迦堂。

『まあ仕事無くなったら金も無くなるのは目に見えてただろつと』
とレノが言う。

『どっかに大金落ってねえかな、それか宝くじでも当たんねえかな』

『真面目に仕事探しましょうよ』
と涼馬が呆れたように言う。

『馬鹿野郎！俺を雇ってくれるような会社があると思うか？教師だって奴が校長だったからなれたんだしよ…』

『やっぱりそういう事だったんですね。』

釈迦堂さんが教師なんておかしいと思ってたんですよ』

『お前、いつからそんなに偉そうに物を言うようになりやがった！
オラー！！』

『痛いですって、レノも何とか言ってよ』

『何で俺にはタメ口なんだよつと！』

釈迦堂とレノはそろって教育という名目で涼馬を弄ぶ。

『ひどいや』

そう言いながらも自動障壁により防ぐ涼馬。

『くそ、攻撃出来ないくせに守りだけは一丁前だな』

そんなこんなで歩いているとある貼り紙を見つける。

【KOS (King of soldier) 開催！優勝賞金1000万！！】

『これだ！』

3人同時に声を上げる。

『天からの贈り物だな。』

戦って賞金までもらえるとは…、しかも1000万つつたらもう仕事探す必要もねえじゃねえか。ついてるぜ』

『ラッキーだなっと』

喜ぶ釈迦堂とレノ。

一方涼馬は

『1000万なんて大金過ぎじゃありませんか？何か怪しいですよ』

『考えすぎだって、多少危険な闘技でもようは勝ちゃあいんだろ？』

そう言うのと受付を済ませる釈迦堂。

『おう、受付終わったぜ。』

ルールは簡単。

舞台はネウローク中央広場から直径10kmの範囲で出演者全員が一斉に戦う、いわばバトルロワイヤルだ。

メンバーは3人までOKらしいから俺達はちょうどだな。

武器は何でもありらしい。
他に何か質問あるか？』

涼馬は呆然としながらも口を開く。

『戦闘って闘技場で1対1とかじゃないんですか？
それに武器何でもありって滅茶苦茶危険じゃないですか!？』

『まあ賞金1000万だしそんな事ったろうと思ったよつと
とレノは特に驚いた様子もなかった。

『まあ、この方がおもしれえだろ？

1対1だったら簡単に優勝しちゃうしよ?』

そう言うのと釈迦堂達は明日の戦いに備え就寝した…

そして翌日戦いの火蓋が切って落とされた。

戦闘開始

―戦い当日、午前9時―

ネウローク中央広場には腕に覚えのある老若男女述べ1000人が集結し、辺り一帯はピリピリとした緊張感に包まれていた。

拳銃を持つ者、ライフルを持つ者、刀、大剣、トンファー、ヌンチャク、薙刀、弓矢、レイピア等々：

それぞれが再度自分達の武器を念入りにチェックしていた。

その広場の周りでは一般人の避難が行われ外部には結界が張られ、医療隊数100人が待機していた。

（ネウローク中央広場結界外のとあるビル）

『もうすぐ始まりますね、それにしてもそうそうたるメンツですね』
『何せ近衛が殺られたことで今まで影に隠れていた奴らが一斉に動き始めよったからな…』

もうこの世界で安全な所などどこにもありやあせん。

今回の戦いはそんな奴らをまとめて捕まえるために計画したんじゃないからな。

恐らく近衛を殺った釈迦堂という男もこの戦いに参加するじゃろう。まあ誰が優勝しようと全員捕まえるがな』

そう言ったのは過去唯一近衛と互角の死闘を繰り広げた男、雷蔵とその右腕、海藤である。

（ネウローク中央広場）

『それでは、今から10分後にKOSを開始します。』

『それでは良い戦いを』

そう言うのと司会者はへりに乗り込み結界を出ていった。

参加者はそれぞれその場を離れて隠れる者やその場に突っ立ち真っ向から戦おうとする者達など様々だ。

『逃げるのもめんどくせえし戦うか』

『そうだなちやっちゃとやつつけて賞金もらおっと』釈迦堂達はその場に居座った。

それから10分後。

『それでは戦闘開始！！！！』

戦闘開始の合図と同時に各地で爆音と煙が上がる。

釈迦堂達のいる中央広場では剣を振るう者、遠くからライフルで狙い撃つ者など様々で早くも脱落者が出ていた。

『よっと、オラァ！』

釈迦堂は銃弾を掻い潜り気功波で的確にスナイパーを倒していく。

『おっと、あぶねえぞっと』

レノも釈迦堂に続いて銃弾をなんとか避けながら炎の魔法で剣士達を一網打尽にする。

『まあ僕は見てるだけだよね』

涼馬は自動障壁により銃弾を防ぎながらレノ達の後を着いていく。

『何だこいつら！？鬼強え！？』

釈迦堂達の周りにいた100人程の猛者達は開始わずか1分で全滅した。

いや1人残っていた。

『貴様、出来るな』

『てめえこそ、やるじゃねえか。』

てつきり今ので全滅したと思ってたんだがなあ』

紅い眼をし背中に黒い大剣を背負っている。

しかしまだ試合が始まってから男は一度も剣を抜いていない。

『我が求めるのは強き者のみ。』

弱者に振るう剣は無い』

そう言うのと剣を抜く。

『この黒刀を使うのも久し振りだな』

少し笑みを浮かべる男。

『こいつ、かなり強えな。』

実力は高畑より上。

近衛に近いな…まさかこんなに早く強敵に会えるとは。

お前ら手え出すなよ、こいつは俺の獲物だ』

心底嬉しそうな釈迦堂。

『出したくても出せる空気じゃねえよっ』

距離を置くレノと涼馬。

『では、参る!』

『じゃあ、来い!』

KOS開幕！

一瞬の静寂の後、黒刀が釈迦堂の目の前を横切る！

『おっと、速えな』

続いて釈迦堂が相手の顔目掛けてパンチを放つ。

しかし、パンチは空を切る。

『初めて見ました。』

釈迦堂さんのパンチが避けられたところ』

驚く涼馬。

『なかなかやるな…』

ならばこれならどうだ？』

そう言うとな男は黒刀を目の前に掲げ、

『秘剣・荒鷹^{あらだか}！』

次の瞬間黒刀が釈迦堂の右頬をかすめる。

『鷹は狙った獲物を逃さない』

そう言う間を置かず次々と釈迦堂に黒刀の連撃を浴びせる。

左頬、右腕、左腕……見る見るうちに傷が増していく。

『へえ、やるじゃねえか。』

最高だ！』

傷付きながらも邪悪な笑みを浮かべる釈迦堂。

『ほう、それだけ傷付きながらも笑う余裕があるか』

『強えなあ、最高だ!』

さらに笑みを浮かべる釈迦堂。

『しぶといな…、それに何だこの違和感は？』

奴はまだ力を隠しているか？』

『ちっ、剣筋が速すぎて見切れねえ!』

反撃の糸口が見切れず防戦一方の釈迦堂。

『荒鷹をこれだけ受けて立っているだけでも大したものだ。』

だがそろそろとどめといこうか』

男は大きく振りかぶる。

『やべえ、釈迦堂さんがやられる!』

助けようとする涼馬。

『まあ待て。』

手えだすなって言われてるだろうと』

涼馬の襟を掴んで止めるレノ。

『でもこのままじゃ釈迦堂さんが』

『そんな簡単にやられねえって。』

たぶんそろそろあれがく…』

その刹那、場の空気が張りつめる。

『むっ!?!』

男は空気の変化を感じ取ったのか剣を止める。

『何だこの空気は？』

これがさっき感じた違和感の正体か？』

男は気を集中する。

『くっ、くくく…。』

ハアーツハツハツハ』

高らかに笑う釈迦堂。

釈迦堂の周りを闇が覆う…

『これが貴様の真の力か。』

何と禍々しいものか』

そう言うとき初めて黒刀を両手で持つ。

『こっからが本当の勝負だぜ？』

『っ！？』

その瞬間釈迦堂が消えると同時に男の後ろに気配が！

『おらよ！』

釈迦堂が男の背後からパンチを放つ。

かろうじて黒刀で防ぐ男。

『あれをガードするなんてやるじゃねえか』

『荒鷹！！！』

連撃が釈迦堂を襲う。

釈迦堂は姿を消すとまたも男の背後に現れる。

『この闇の前ではどんな攻撃も通用しねえ』

『なるほど、近衛を倒したのは貴様か』

『そう言うと黒刀を納める。』

『あっ？やらねえのか？』

『貴様が近衛を倒した男であると分かった以上、今はまだ戦えん。しばし休戦といこうか』

『どういう意味だ？』

辺りが晴れ元の空気に戻る。

『心配せずとも雑魚どもを片付けたらまた貴様とは戦うことになる』

『まあいいか、確かにこんだけ雑魚がいちゃ戦いに集中出来ねえしな』

『そう言うとその場を離れそれぞれ別々の方へと別れていく。』

『あいつ、何物だったんだ？』

『かなり強かったですね？』

『まだ他にも強え奴いるかな？』

心底戦いを楽しんでいる釈迦堂。

KOSはまだ始まったばかり…

決断

結界の中は戦場と化している。

『おお、やってるやってる』

謎の剣士との戦いを終えた釈迦堂達は次なる強敵を求めさ迷っていた。

四方八方から飛んでくる銃弾を避けながら…

『ああ、目障りだな』

そう言うのと辺り一面に気功波を数発放つ。

一瞬にして何十人もの人間が倒れる。

—この戦場にどれだけ強え奴がいるかなあ—
そんな事を考えながら次なる戦場へと歩いていく…

—剣士 side—

—あの男が釈迦堂。

私の師である近衛鉄心を殺した男…—

小さい時から世話になっていた恩師。

世界最強であり憧れでありいつかは越えたいと思っていた高き壁。
ここ1年程会っていなかったが、日本の学校で元気に校長を務めていると聞いていた。

しかし先日聞かされた死亡という事実。

しかも寿命や病ではなく戦死。

闇討ちではなく1対1による決闘。
しかもその相手は敵ではなく部下。

事実を知りその男釈迦堂を追っていた。

そして偶然遭遇した2人。

師匠の仇であり、クールに見せながらも内心は殺したい程憎んでいた。

しかし戦いの中で疑問が出る。

—本当にしていいのか？—

師匠の仇であるとはいえ、師匠の部下で信頼されていた人物。

—あの男を殺す事を師匠は望んでいるだろうか？—

そんな思いが邪魔をし、結局殺し損ねた。

だが戦い終盤完全に圧されているにも拘らず戦いを楽しんでいる。
さらにあの規格外の闇の力。

あの力は5年前世界を救った世界最強の機関である【WRSB】が
倒したとされている敵の親玉が使ったとされる力。

—それをなぜあの男が？

奴は何物なんだ？—

何にしてもあの男の存在は危険である。

—先ほどの戦いでは躊躇してしまい倒し損ねたが、次に会ったら確
実に息の根を止める—

そう誓い歩きだす。

釈迦堂を追って……

悪とは？ 平和とは？

（KOS開始から2時間）
すでに過半数が脱落している。

『あれから奴は現れねえな。
参加者もう数える程しかいねえしそろそろ出てくる頃だと思っ
うんだが』

試合開始直後とは打って変わって静まり返った広場で呟く釈迦堂。

『結局あの男程力を持った奴もいなかったしなっ
と』
レノも呟く。

その時！
釈迦堂達は殺気を感じる。

『来たか』
そう言っ
て裏を見ると剣士が立っていた。

『よう、考え事は終わっ…』

『殺す！』

問答無用で斬りかかってくる剣士。

『いきなりかよ！』

黒刀を避けながら気功波を放つ釈迦堂。

それを黒刀で弾く。

『いきなり驚くじゃねえか。
まあ、ちよつと話そうぜ?』

『貴様と話す事など何もない。
師匠を殺した貴様等と!』
そう言うのと荒鷹を放つ。

『ちつ、しゃあねえな』
そう言うのと闇の力を解放する釈迦堂。
ドス黒いオーラを纏うと難なく荒鷹を避ける釈迦堂。

『まあ、落ち着けよ?』
それに師匠を殺したって何の事だ?』
そう言いつつ間を取る釈迦堂。

『近衛師匠の事だ』

『!?!?』
てめえ近衛の弟子だったのか。
どうりで強いと思った』
邪悪な笑みを浮かべる釈迦堂。

『くっ! 強い奴と戦いと言うだけで師匠を殺した戦闘狂が!!』
貴様が師匠を殺した事で世界中で悪党が好き放題やってるんだぞ!』

『くっくくくつ、そりゃあそうだろ?』
何せ悪い奴を片っ端から排除してた平和の象徴だからなあ?』

『くっ! そうなる事が分かっててなぜ師匠を殺した?』

『だから言っただろ？』

強え奴と戦いてえだけだって？

それにこのまま平和な世界を演じるのはよくねえぜ？

マスコミを通して天下を取った様な事を言う奴もいれば、住む家すら無く道端で野宿している奴もいる。

こんな世界が平和だなんて笑っちゃうぜ！

だから俺は一度この世界をリセットして再構築【改変】するのさ。

そのためにはあのジジイが邪魔だったんでな』

『それはただ地球を破壊しているだけだ！

そんな理由で師匠を殺す等認めん！』

『なら俺を止めてみるよ？

お前に出来るか？

師匠を殺した俺を倒す事が』

集中力を極限まで高める剣士。

『見ていて下さい師匠。

今こそあなたを超えて見せます。

我が名は剣士マクス。

その身に刻め！』

『くっくっく、来な！』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0537r/>

光無き闇にありふれた街

2011年10月8日19時11分発行